

機関番号：23901

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21890219

研究課題名(和文) 精神障害者の家族が抱く就労への想いと支援のあり方

研究課題名(英文) Family Members' Feelings On The Working Of Their Community-Dwelling
Mentally Handicapped individuals And Ideal Means Of Support

研究代表者

中戸川 早苗 (NAKATOGAWA SANAE)

愛知県立大学・看護学部・助教

研究者番号：60514726

研究成果の概要(和文)：【背景と目的】精神障害者の就労環境は厳しく、挫折体験を持つ当事者は多い(2009年中戸川他)。一方精神障害者の就労に関する家族の想いを調査した研究は少ない。そこで精神障害者の就労に関する家族の想いを調査し看護援助への示唆を得たいと考えた。

【方法】家族会メンバーを対象とした参加観察とインタビューによる質的研究。

データ収集期間：2009年12月～2010年6月。研究参加者：父母3名。

【結果・結論】研究参加者は、「一人前になって欲しい」という親心から、働くことに向き合えない子どもに腹立たしさ・焦りを感じていた。しかし子どもにも働きたいという想いがあり「子どもなりの活動と挫折の繰り返し」を体験していたことを知り、「親として就労より生活維持を優先してほしい」という想いに変わっていった。このような就労への期待とそれを阻む問題・諦めざるをえない葛藤状況への想いを十分に受け止めた情緒的な支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Background and Aims: Mentally handicapped individuals face many difficulties while working; they also encounter many failures and setbacks. (Nakatogawa et al., 2009). Few studies have investigated the feelings of the family regarding the working of a mentally handicapped individual in their family. Therefore, we evaluated the views of the families in order to identify solutions for nursing support for mentally handicapped individuals.

Methods: December 2009 to June 2010, a qualitative study was conducted based on the interviews and observations of three family society members (1 father and 2 mothers).

Results and Conclusions: All participants wanted their children to be fully-independent and full-fledged adults while their children could not cope with their lack of work. Although they loved their children, the parents felt irritated and impatient. However, their views have gradually changed when they noticed their children had experienced their work with repeated failure. They began thinking about placing the priority on maintaining their daily life over their work. This study suggested the necessity of emotional support to the families of the mentally handicapped. This support should be based on the understanding the parent's conflict and the gap between their expectation of their children's work and the underlying problems which may sometimes lead to quit their job-hunting unwillingly.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	710,000	213,000	923,000
2010年度	550,000	165,000	715,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,260,000	378,000	1,638,000

研究分野：医師薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：精神障害者の就労、精神障害者の就労支援、精神障害者家族会、精神障害者の家族の想い

1. 研究開始当初の背景

現在、地域における精神障害者を取り巻く就労支援は、「障害者の雇用の促進等に関する法律」の改正や「障害者自立支援法」廃止の動きに伴い変遷の時期にある（精神保健福祉白書、2011）¹⁾。一方、厚生労働省の2008年の患者調査によると精神科病院に入院中の患者は約31.5万人、うち7万人が社会的入院となっている。

研究者らは、精神障害者を対象に「働く動機を支える想い」に焦点を当てた研究（中戸川ら、2009）²⁾を行い「家族の支え」が精神障害者の働く動機を支える一つの要素となっていること、精神障害者が継続的に就労に就くためには家族の心理的な支援が必要であることを報告した。

しかし、これまでの研究では精神障害者の就労を支えている家族の想いを明らかにした質的研究はほとんど見当たらない。

そこで今回は精神障害者の社会復帰を促進させる環境を作る上で最も重要であると考えられる家族に焦点を当て、精神障害者を抱える家族の苦悩・経験を明らかにし、具体的な社会復帰に向けての支援のあり方について考えた。

2. 研究の目的

本研究では、精神障害者を抱える家族の抱く「精神障害者が就労すること」への想いとその変化の過程を明らかにし、家族が抱く「就労」への想いをふまえた看護援助への示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) データ収集場所の概要

A市内の家族会で、会員数は56名、賛助会員は365名である。主な活動は、①総会（年度初め）、②例会（月一回）、③役員会（月一回）・おしゃべり会（月一回）④県・市家族会連合会等への参加、⑤請願・陳情・要望活動などである。「おしゃべり会」では、会員の方々が、家族会で販売している自主製品を作りながら、自由におしゃべりを楽しんだり悩み事を相談したりしていた。自主製品に関しては、地域のイベントに参加して、その売り上げを、親亡き後の子どものために使いたいと、家族会の口座に貯金をしていた。

おしゃべり会や例会の参加者は、毎回20名ほどであった。会員の平均年齢は60代半

ばであり9割が親の立場、その他に兄弟や伴侶の立場などであった。家族の疾患は、主に統合失調症で、その他にうつ病や神経症であった。

(2) データ収集期間

2009年12月～2010年6月（全20回・1回4～8時間）

(3) 研究参加者

研究の主旨に同意し研究参加への承諾を得られた家族3名を対象とした。父親の立場1名、母親の立場2名であった。

(4) データ収集方法

参加観察法およびインタビューにより情報収集をした。家族会活動に参加しながら、家族会の活動の様子やメンバー同士の関係などを観察した。これはレイニンガー（Leininger）³⁾が示す4段階の観察者の役割のうち「ある程度観察もするが参加が主」という立場である。

インタビューは非構成的方法で各々の研究参加者につき30分～1時間30分程度複数回実施した。インタビュー内容は、研究参加者の家庭、職場、対人関係等の社会生活場面やその状況、「精神障害者が就労すること」について、どのような想いを抱いてきたか、それはどのように変化したのかなどである。

同時に研究参加者の表情・態度などの非言語的反応を含め、フィールドノーツに記述し逐語録を作成した。

(5) 分析方法

フィールドノーツの読み合わせを行い、精神障害者の家族が抱く就労への想いに関連する内容を抽出した。その内容を分類し、個々人の「働くことへの想い」に焦点をあてて分析し考察した。

データの読み取りや分析の偏りを防ぐため、これらの一連の過程を通して定期的に質的記述的研究に熟達した精神看護学を専門とする研究協力者によるスーパーバイズを受けた。

(6) 倫理的配慮

研究参加者には研究の趣旨と方法を説明し、本研究への参加は自由意思であること、語りたくない内容は無理に語らなくてもよ

いこと、得られたデータは研究以外での使用はせず、匿名性が保たれること、公表時には許可を得ることなどを説明した。収集したデータを研究参加者に開示し、研究に使用不可能なデータの確認を研究参加者全員に行った。また、その際、データの訂正や補足を受けた。本研究は、愛知県立大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得た。

なおインタビューの際には再度、研究の目的と研究参加者の権利について説明し、研究参加およびインタビューの録音の同意を得た。インタビューの場所と時間はプライバシーと心地よさが保証されるように、参加者の希望を尊重した。

4. 研究成果

(1) 結果

① 研究参加者の属性

研究参加者3名は、統合失調症を患った息子の親で、父親1名、母親2名であった。年齢は60歳代～70歳代であった。彼らの息子は皆、現在までの間に、一般就労やアルバイトによる就労体験があった。そして、そのことへの挫折体験もしていた。(表1参照)。

表1 研究参加者の属性

	年齢/性別/ 同居家族	息子の年齢/ 疾患	息子の発症 時期	息子の就労 経歴	現在の就労状況・社 会福祉施設利用状況
A氏	60代後半 男性 妻と息子の3 人暮らし	30代半ば 統合失調症	大学生の頃	アルバイト (半年間維 続したことが ある)	地域活動支援セン ターを時々利用
B氏	60代後半 女性 夫と息子の3 人暮らし	40代前半 統合失調症	30代前半	高校卒業後 から30代前 半まで同 会社に勤務	地域活動支援セン ターを時々利用・家事 を部分的に担当
C氏	70代前半 女性 夫と2人暮らし、 息子は別世帯	40代前半 統合失調症	大学生の頃	30代前半ま で就労経歴 なし	小規模の工場(職種) で半日勤務を10年以上 継続中

② 精神障害を抱えた息子の就労に関する各研究参加者の想い

3名の研究参加者からは、就労に関する想いと共に、息子が精神疾患を患ったことに対する辛い体験や、困難感が語られたが、その現実と向き合いながら就労を目指そうとする想いが多く語られた。

精神障害の息子の就労に関する親としての想いを分析したところ、息子にどうにか働いてほしいという就労への期待とそれを阻む問題・諦めざるをえない状況についての葛藤、そしてその想いを受け止めて行く過程について語られた。3名のケースを紹介していく。

文中の【】はカテゴリー、『』はサブカテゴリー、「」は研究参加者からの聴き取りの内容を示した。また、精神障害を抱えた息子の就労に関する家族の想いの変化の過程についての関連図を図1に示した。

A. 父親としての期待とその後の反省・苦しみ

a. 父親の男としての期待

A氏は、大学卒業後定年まで大企業で働いてきた人である。

息子は、子どものころから親が感心するほど優しい子だった。そのため福祉の道などが息子には合っているのではないかと思い、話し合っ、大学は福祉科を専攻した。自分を生かした職に就けるようにルールを引いてやりたいという親心が窺えた。

しかし、息子は大学生の頃統合失調症を発症していたため、卒業後就職しなかった。A氏は、この病気のことがよく分からず、「やっぱり、もう、卒業の時期になると、働いて、自分の生活はせな、あかん、と、思うじゃんか、親いうものは、男の子には、特に、そう、思うものだよ、ったら、わし、めちゃくちゃなことやった、と、思うんだ、働らかざるもの食うべからず、ね、でま、1年や2年は我慢するんだ、ね、1年や2年は、で、やりたいこと、やらしただけど、まあ、24か26くらいになったら、そろそろ、考えな、あかんでしょ、で、そうやって、子どもを追い詰めたん、就労して、生きてかな、あかんがね」と、『父親としての就労への期待』、『一人前になってほしい』という想い等【父親の男としての期待】から息子を追い詰めた現実が語られた。

b. 親の力だけではどうにもならない無力感

この状況をA氏は、「追い詰めたんだよね、結局はね、おれが、ね、追い詰めたんだよ、だから、彼も、アルバイトやったりして、挑戦してね、で、倒れて、それで、再発もしたんだろうな」と【息子なりの活動と挫折の繰り返し】をしていたのだと後になって感じたと辛そうに語った。息子は、調子の悪さを感じ、クリニックを受診していたが、A氏は受診の話聞いても、何を甘えたことしているのか、と取り合わなかった。『息子の辛さに寄り添えなかった』ことに関する後悔の気持ちも語られた。

A氏は、就労しない息子を追い詰めたことに対し、何でもっと早く分かってあげなかったのだろう、と『病気の理解が遅れたことへの罪悪感』など【息子に対する申し訳なさ】から心を深く痛めていた。

また、病気への理解に関してA氏は、「親がね、乗り越えなければならぬ問題とはね、病気を理解したらそれでいいか、ということね、今度ね、そのことによって、負を抱えるんだな、何が負かということね、わが子が病気と障害がある、ってことを、分かるって、これは、不憫に思っちゃってね、だから、わが子を、抱えるんだ、結局それが、その子の自立の妨げになる」と『病気と障害があることを受け止めざるを得ない』と語った。また、親が息子を不憫に思い、これ以上我が子に無理をさ

せたり、何かに挑戦して失敗するようなことをさせたら傷つく、という想いが強くなり、子どもを抱え込もうとする現実が語られた。病気や障害があることで、子ども自身が持っている生きる力を見いだすことがさらに難しくなっているのではないかと考えられた。さらに子どもがどうしたいのか、子どもの望みを受け止める、ということ置き去りにしてしまう危険性があると考えられる。『抱え込むことが子どもの自立の妨げになる』のだが、そのことに親はなかなか気づけない、【病気の理解に伴う苦痛】が示された。それは、就労を妨げる要因となるものと考えられた。

c. 社会で支える仕組みをつくって欲しい

不憫に感じ無理をさせたくないと思う一方でA氏は、「親が我が子を不憫に思って、就労は難しいとかね、そういうふうを決めつけちゃって、諦める、これも一つの悲劇で、やっぱり、本人の気持ちが一番優先だからね」と『働きたいという望みを支えたい』というアンビバレンツな想いが語られた。A氏は、「一週間に一回でも、二回でも、たとえ、1時間でもいい、働く喜び、これをね、お金じゃないんだわ、働く、という、喜び、で、働いて、それで、200円でも、300円でも収入があると・・・これはね、人間の尊厳にかかわる問題だもん」と“息子の就労”に関する考え方が現在は異なってきた。A氏は現在、息子が図書館に行ったり、地域活動支援センターに出かけるのを見て『息子を見守る』ようになり、【できることをしてほしい】と思うようになった。【親として就労より生活維持を優先してほしい】と考えていると同時に、前述したように『働くことを体験させてあげたい』とも思っている。しかし、A氏は、社会の受け入れ態勢が充分でないと訴え、『精神障害の特性を知ってほしい』、社会から疎外されているような気分を味わい『支援をうけているという実感が無い』だろうと語った。

新しいことに馴染むことが苦手な精神障害者には、ゆるやかな居場所を用意しながら『少しずつ次のステップに進める支援がほしい』『制度を変えて子どもの望みを叶えたい』などと語り、精神障害者の就労を【社会で支える仕組みをつくってほしい】という想いを抱えながら、家族会活動に取り組んでいた。反省から見いだしたこの姿勢が、A氏の支えの一つになっているように思われた。

B. 社会との距離が大きくなっていく息子に対する不安

a. 親としての期待

息子は、高校を卒業して10年以上勤務していた会社を突然退職し、その後7年間、病院にも行けず引きこもってしまった。仕事に

関して息子は、「働きたいけど働けないんだ」と訴えていたとB氏は語った。【息子なりの活動と挫折の繰り返し】を体験し息子も苦しみを抱えていたようだ。B氏は振り返っていた。

B氏は、実家が農家で子どもの頃から家業を手伝い、働くことに関しては親から厳しくしつけられてきた。そのため、働くこともせずに家にいる息子に、何をやってかという腹立たしさを感じ、またその時の息子に対する言動を反省したりしていた。しかし社会との距離を縮めることができない息子に対して、再び働いて欲しい、何とか自分を取り戻して欲しいという想いで悶悶と悩み、苦しんだと語った。

b. 親なりの支えと限界

苦しい状況から抜け出すきっかけとなったのは、B氏が家族会と出会い保健所の相談窓口から医療に繋げることができたことである。しかし、開始された治療が合わなかったため、【薬物療法への複雑な想い】を抱え、薬物療法は受けないという判断を、息子を含め家族皆で話し合って決めた。B氏は、「薬を飲んでいないことについては、毎日悩んでいます。本当にこの選択でいいのかと。でも、決めたことだものね。だから、その分、散歩に行ったり、家の仕事したりでリハビリを一緒にやっついていかないと、って、夫と一緒にやっています」と、夫と共に息子のリハビリに取り組んでいる様子が語られ、生活の中には多くの工夫が取りこまれていた。それは、“ご飯を食べるためには働かなくてはいけない”という考えのもと、『就労としての家事』を念頭においたリハビリプログラムであった。例えば、「買い物では、いくらあったらお願いしたものが買えるのか、必要な額を息子に考えてもらったりもしているの」とB氏は説明し、また「家では、B家作業所と言っているの。働いてもらった分、今まではお小遣いとして月7000円渡していたんだけど、今は、封筒に「給料」と書いて渡しているの。そのうちの1000円は毎月貯金するように伝え、夫と一緒に銀行に付いて行って機械で貯金しています。でも今は息子一人でするようになりました」と語り、生活能力の向上が観られるなど『日常生活の調整』がなされていた。また、B氏は、息子が家の仕事を手伝ってくれていることに関して「助かっている」と表現していた。家族間でお互いに支え合っている、と実感できているようだ。トイレ掃除など息子の仕事であるが、丁寧に仕事をこなせるわけではないそうだが、B氏は「トイレ掃除なんてね、ちょっとこする程度でね、そんなに綺麗にやっているわけではないのよ、でも、よくやってくれているね、って言うようにしているんです。本当に助かっていますか

ら」と語った。リハビリに手ごたえを感じることで、B氏は安心感を得、【生活の中に活気を取り戻していく】感覚に繋がっているように思われる。

以前のB氏は、息子に一般企業で働くことを求めていたが、現在は、「人間は働かないといけない。外に行ってね、生きていくためには働かないといけないよね。でも、家の仕事、っていうのもあるものね。これも仕事だよね」と語るようになった。息子のペースを大切にしながら、「仕事をもつと自信が持てるようになって、自分に安心できるんじゃないかなあ、と思うんです。だから、働けるものなら、働かしてやりたいとは思いますが。今は無理ですけど」と語り、息子にとって必要なものなので、息子のリハビリ段階に合わせて獲得し、自立の方向に向かっていくことを願っていた。

C. 理解ある雇い主との出会いと就労

a. 親としての期待

C氏の息子は優秀で大学の教員から大学院への進学を勧められたという。また、C氏の夫は現在70代後半だが、大学を卒業し金融機関に勤務をしており、C氏の実家も医業を営んでいたことから、C氏は息子にも「ホワイトカラーの職に就くものだ、というイメージがあった」という。『一人前になってほしい』という強い思いがあった。そのため、息子を追い詰めるような発言もあったと振り返った。

b. 親の力だけではどうにもならない無力感

C氏は、息子が病気になってから、いろいろなところに出向き病気に対する知識を得た。その後、働けるようになるのは夢、理想であると認識するようになり、「働く事を強いたり就労に対する親の希望を言わないようにし、押さえていた」と語った。もう何よりも息子の病状が良くなることを願う『期待したい想いを抑える』ことをしていたという。それは、「息子も、ホワイトカラーにつくもの、という家の中の雰囲気にプレッシャーを感じていて、皆に期待されて、息子の方が働くことへの焦りを抱いていたので、無理をさせないようにという想いからなのです」と語った。しかし、『期待したい想いを抑える』ことは親にとって簡単なことではなかった。働けないという状況を一番早く受け入れられたのは、「たぶん息子で次にC氏でそして最後に夫だった」という。

息子も将来への夢を断念し、「自分は、こういうことしかできない、このくらいできれば、よしとするか、っていうふうに、自分で納得した時期があると思うんですけど、親には、言いませんけど」とC氏は語り、【息子なりの活動と挫折を繰り返し】、その苦痛を

乗り越え折り合いをつける生活をスタートさせた。しかし親の方は気持ちの整理ができずにいた現実が語られた。

c. 今の息子を応援しようという想い

C氏の息子は、障害を持っていても働くことを諦めず、町工場で毎日、半日ずつ働き、10年が経過しようとしている。その「息子の頑張る姿を見て、次第に夫も息子の回復を喜ぶ気持ちが出てきたんです。夫も受け入れられるようになったのでしょね」とC氏は語った。

C氏は現在、息子の就労に関して、仕事はしてほしいが、何より急性期に陥るようなことは避けたい、仕事は行ってくれたらそれはそれでいいと感じており、【親として就労より生活維持を優先してほしい】という気持ちが強いようで、子どもの健康を第一に思う親心が表現された。【できることをしてほしい】というささやかな希望に変わっていったと語った。

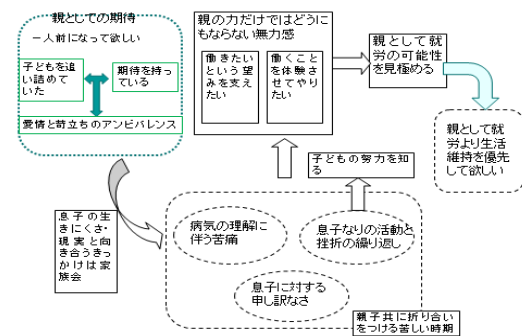


図1 精神障害を抱えた息子の就労に関する親の想い

(2) 考察

研究参加者の語りからは、一人前になって欲しいという親心から、子どもに「働くこと」を求め「子どもを追い詰めていた」ということを振り返る語りが多く聞かれた。また、この背後には「期待を持っている」故の「愛情といらだちのアンビバレンツ」な想いが聴かれた。家族同士がどのようなことをきっかけに、このような困難な状況を切り開いてきたのかに注目して考察し、看護支援について考える。

① アンビバレンツな想いと向き合う

すべての研究参加者は、『一人前になって欲しい』という親心から、働くことに向き合えない子どもに腹立たしさ・焦りを抱き【親としての期待】を先行させて子どもを追い詰めてきたと振り返った。多くの親がこの「愛情といらだちのアンビバレンツ」に苦しんでいた。しかしその後、息子は働かないのでは

なく、この病気を思い【子どもなりの活動と挫折の繰り返し】を体験し、苦勞していたことが分かれると、息子を責める気持ちが軽減していったように思われる。息子と闘病の過程を共にする経験を通して、親も学習し理解を深めていったと考えられる。同時に、『病気の理解が遅れたことへの罪悪感』が生まれ【息子に対する申し訳なき】から親の苦しみは増していったように思われる。Mona Wasow(2010)⁴⁾は、「子どもの精神の病に対処している親は、子どもの幸せに対する責任を感じ罪悪感を強め、さらに自尊心の喪失をももたらす」と述べており、親にとっての苦しみの深さが窺える。

②理解と共に深まる親としての苦悩

この苦悩のプロセスの中で、研究参加者は皆、家族会活動などに参加し精神の病について理解を深めていた。しかし、家族会の存在が救いになる一方、この病気のことを知れば知るほど息子の就労への希望は絶望に変わり、【病気の理解に伴う苦痛】から、息子を不憫に感じ無理をさせたくないという想いが深まっていった。多くの親は家族会への期待が大きいだけに、一時的にはこのような想いを経験する可能性があると思われる。継続して家族会につながっていくためには、このような心境を共有し合うなどのサポートが必要であろうと思われる。

③息子の就労に関する親の気持ちの変化

研究参加者たちの心境は、その後、変化し一般企業での就労を息子に期待していたA氏は、「福祉就労でもできればいいかなあ」と考えるようになった。またB氏は「家の仕事、っていうのもあるものね。これも仕事だよね」と語り、C氏も「10年間継続して働いている職場に、半日ずつ行ってくれたらそれでいいです。急性の症状を呈することなく」と、【できることをしてほしい】というささやかな希望が変わっていったと語った。中井(2002)⁵⁾は、精神障害者の社会復帰に関して「二つの面があると思う。一つは、職業の座を獲得することであるが、もう一つは“世に棲む”棲み方の獲得である。そして、後者の方がより重要であり、基礎的であると私は考える。すなわち、安定して世に棲みうるライフ・スタイルの獲得が第一義的に重要である」と述べており、前述のA氏、B氏、C氏は闘病する息子と向き合う経験から、息子自身が自分なりのライフスタイルを獲得することで納得するという考えが変わっていったことが窺える。

④子どもなりの社会復帰

精神障害者の就労の意義について、野中ら(2003)⁶⁾は、「社会の一員であるという実

感を個々人にもたらししてくれるもののひとつが、“就労”である。生活を成り立たせるためのものであり、自分自身の能力を確認するもの、生きがいともなり、生活のリズムをつくり、メリハリとなるものでもある」と述べている。社会復帰への実現に向けて「就労」のもたらす意義が大きいことが窺える。

また中井(2002)⁵⁾は、就労して自立するという多数派の考えに障害者の生き方を当てはめることが、本来の社会復帰の考え方ではないと示唆している。しかし最初、家族は、息子の就労に関して、マジョリティであることを求めている。

これらのことから、精神障害者の「働くこと」に関して多様な想いを抱く家族への看護支援としては、【親としての期待】が強い時は、マジョリティへの想いも強く、これらの考え方は連動していた。そのため期待が外れたときには、喪失感や悲嘆を生じ、同時に、親としての罪悪感を強める結果になったと考えられる。

これまで語られた就労への思いは想像以上に多様であった。これらの実態を理解した上での看護支援が必要であることが示唆された。

<参考文献>

1. 精神保健福祉白書編集委員会 精神保健福祉白書 2011年版 中央法規出版 2010
2. 中戸川早苗・出口禎子：精神障害者の働く動機を支える想いと支援のあり方—地域共同作業所での参加観察を通して—, 日本精神保健看護学会誌, 18巻, 70-79, 2009
3. マデリン D. レイニンガー著, 石井邦子訳：レイニンガー看護論文化ケアの多様性と普遍性
4. モナ・ワソー著, 柳沢圭子訳：統合失調症と家族, 金剛出版, 2010
5. 中井久夫 中井久夫著作集 精神医学の経験 5巻 病者と社会, 岩崎学術出版社, 2002
6. 野中猛・松為信雄：精神障害者のための就労支援ガイドブック, 金剛出版, 2003

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中戸川 早苗(NAKATOGAWA SANAE)

愛知県立大学・看護学部・助教

研究者番号： 60514726